



負債も、社員も、すべて受け入れた裏側も語ってくれた。

「仕事ができる、できないじゃなく、良い人ばかりだったのよ。一生懸命な人や他人を気遣える人は、信頼できる。できないところもあっていいんだ。ミスしてもいいんだ。したらそこをフォローしてやれって言える。『全員がな

んでもできる』みたいなことを目指すとしんどくなるよ。みんなでやればいいと思う。地域で生きていくってのはそんな感じで十分でしょ。」

「愛嬌だけで仕事をしないご老人もいるけどね。がはは！」
「恥ずかしくなったのか、次郎社長は照れ隠しに笑い飛ばした。」





再起を賭けた

「駿」誕生秘話

五年前に生まれた「純米酒駿」。二〇二二年は、福岡県知事賞、全米日本酒歓評会 銀賞、二〇二三年はフランス、パリでの日本酒コンクール KURAMASTER プラチナ賞、国税庁鑑評会金賞……。純米酒として異例の受賞数を誇る。昔ながらの酒造りの生き字引、渡辺貞夫杜氏が手がけ、こだわり抜いた山田錦を使っている。いそのさわ再起を賭け、生み出した。

何より、うきはの名水湧水。阿蘇山系から染み渡り、耳納連山伏流水として蔵内から湧き出す水を醸すことで、仕込みは集大成を迎える。「駿」の味わい深さや、すつきりと爽やかな呑み心地は、呑んだ途端に玄人すら、虜にした。

しかし、「駿を売りたい。取引できないか。」とバイヤーから声が上がっても、営業担当者は、駿に触れることができなかった。薄利多売の企業風土の中で、扱い方を誰も決められなかったのだ。蔵の再起を賭けながら、矛盾の中で生まれたのが、「駿」だった。

